

「死んだら終わり、だから生きる」



「外国人の子どもの心の叫びを知って」と講演する眞志アベリン・飛雄馬さん＝愛知県小牧市で

眞志さんは十一歳の時、サンパウロから家族とともに来日。地元の小学校に通い始めたが、しばらく経たず同級生たちの輪に入れてもらえなくなった。「外国人のくせに」「すごいな」と笑われたこともたびたび。「先生の目が届かない。トイや休み時間中は、殴られたり、けられたりが日常茶飯事だった」中学校に入るまで、いじめはさらにエスカレートした。「二飯は手で食べているんだろ」「おまえの日本語、気持ち悪い」。度重なる暴言に耐えきれず、一度相手を殴ってしまったことがあった。それだけを見た先生は「おまえが悪い。謝れ」と言った。「この時、自分はここに存在している意味はないとさえ思った」それでも高校への夢は捨てきれず、定時制に進学。

少年時代の心の傷を語る

外国人の子どもの支援 NPO 理事長 眞志アベリン・飛雄馬さんが講演

「死んだら終わり、だから生きるんだ」。外国人の子どもの支援する「多文化共生NPO世界人」理事長で、アベリン出身の目黒三三・眞志アベリン・飛雄馬さん（27）＝津市＝が、こんなタイトルの講演会を愛知県小牧市で開いた。眞志さんは少年時代、学校や地域に居場所がなく非行に走り、大人になってからも「暴力」から抜けられない生活が続いたという。今、再び前向きに生きようとする意、自分の生い立ちを語ることで「これからの子もまたさばい、同じような過ちを繰り返さず生きてほしい」と訴える。

そもそも暴力が待っていた。不慮で、思慮と仲間が増え、気が配る。最初は「四十八年間で生きてきて、何も楽しかった。不良は、自分たちも心に傷を抱えていた。だから、以前のように外国人だからと言っただけで、差別されるのがなかった。荒れた生活に慣れ、再び傷害事件を起こして牢の中へ。ただ、生きている充実感が味わえた。その後、仲間たちで傷害事件が発生。逮捕され、約一月後に釈放されたが、その後も生活は変わらなかった。「内心はまじめにならな」と思っただけ。でも、なかなか仲間と縁を切ること

ができた。転機が訪れたのは二十歳の時。子どもが産まれ、真で国際化対応教育指導員として、外国人の子どもたちと関わり、親子で生活のサポートに尽力している。父の知合いの社長が営業の仕事を紹介してくれた。頭のNPOジュニアの活動に協力した。「今でも僕と同じような状況の子どもの生い立ちを話すことは苦しいが、こころが少しでもこの気持ちを少しだけでも分かってもらいたい」と言う。支援活動の傍ら、大学進学を目指して受験勉強にも励んでいる。外国人の子どもたちが、少しでも将来に希望を持てるように。

社会に復帰した後、それまでの仲間とはきっぱり別れ、今三重県内の学校で国際化対応教育指導員として、外国人の子どもたちと関わり、親子で生活のサポートに尽力している。父の知合いの社長が営業の仕事を紹介してくれた。頭のNPOジュニアの活動に協力した。「今でも僕と同じような状況の子どもの生い立ちを話すことは苦しいが、こころが少しでもこの気持ちを少しだけでも分かってもらいたい」と言う。支援活動の傍ら、大学進学を目指して受験勉強にも励んでいる。外国人の子どもたちが、少しでも将来に希望を持てるように。

共生ニッポン